日本体育・スポーツ哲学会第30回記念大会を振り返って¹

近 藤 良 享 (筑波大学)²

日本体育・スポーツ哲学会第30回記念大会は、2008年9月13日(土)午後から15日(月・祝)午前まで、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。本学会の30周年を記念して、9月10日(水)から15日まで、「スポーツ哲学研究セミナー2008」(「国際スポーツ哲学会(International Association for the Philosophy of Sport: IAPS)」第36回大会(IAPS 2008)と「日本体育・スポーツ哲学会」第30回記念大会のジョイント)として開催した。なお、第30回学会総会に先立って、同じく日本体育・スポーツ哲学会の30周年を記念して創設された顕彰制度により、第1号の学会賞が高松昌宏氏(金沢大学)に、また奨励賞が竹村瑞穂氏(筑波大学大学院)に贈られた。

以下は、日本体育・スポーツ哲学会第30回記念大会の発表の紹介とプログラムである。

スポーツと武道における精神性と精神主義：佐野之人(東亜大学)は、スポーツにおける最強の境地がそれぞれのレベルにおいて可能であること、また、「最強の」境地を共に求める営みのうちで、異文化理解とニヒリズム超克の可能性が開かれうることを示そうとした発表である。最終的に、ニヒリズムの成熟期におけるスポーツの意義と可能性が満たされる条件として、西洋型スポーツが自己完結的な遊びを、西洋思想の伝統における遊びの高い概念に遡りつつ、根源的なものへと開かれた遊びとする必要があること、また日本型スポーツが形骸化した

精神主義を禅や儒教、老荘思想が本来持っていた深い宗教性に遡りつつ、そうした宗教性との関連において有していた「遊び」へと開かれた精神性とすべきことが示された。

運動が「できる」と「教える」の関係性：森田啓之(兵庫教育大学)は、指導者自身の運動が「できる」ということと「教える」ということの関係性について、特に運動を「教える」上で「できる」ことがどのような意味をもつかを明らかにしようとした発表である。この発表では、「運動ができる」と「運動を教える」ことの両者を理解した上で、運動が「できる」と「教える」の関係性が、①「運動に関わる事実の獲得を目指した教える」と「できる」、②「運動技能の獲得を目指した教える」と「できる」、③「運動に関わる規範の獲得を目指した教える」と「できる」の下位概念に分類されることを指摘した。

体育授業におけるゆとりの再考 - 遊び論を手がかりにして：桑原浩史(上越教育大学大学院)は、子どもの活動を活性化させるために、体育授業における「ゆとり」とは何か、どのように作用しているかについて、遊び論を手がかりにして検討した発表である。実際の体育授業について、「授業計画段階におけるゆとり」、「授業実践におけるゆとり」、「評価場面におけるゆとり」の3つの時系列に分けて考察したものである。

シッティングバレーボールの教材化 「配慮できる 身体」の観点から：田中愛(武蔵

¹ Report on the 30th Conference of Japan Society for the Philosophy of Sport and Physical Education

² Yoshitaka KONDO, The University of Tsukuba, 1-1-1, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305-8574

大学)は、「配慮 できる 身体」の観点から、シッティングバレーボールの教材化の可能性を明らかにしようとした。シッティングバレーボールは、第2次世界大戦後のオランダにおいて、体に障害を負った人々のリハビリテーションとして発祥したスポーツであるが、バレーボールの初心者はもちろん、長年の経験者でさえも新しい文化を体験できる。教材としての意義は、既存のバレーボールの枠組みを離れつつも、「身体として配慮する」場面を確保することができるだけでなく、さまざまに差異を持った人々が、同じコートに入り勝敗を競うことができる。それゆえ、「協力」及び「競争」を通して「配慮 できる 身体」を育成する、有用な教材となると結論づけられた。

遊戯状況における技術の存在論的意味について：堀田高弘（上越教育大学大学院）は、体育授業における技術的な指導の手がかりを探るために、遊戯状況における技術の存在論的意味について探究した発表である。具体的には、「バレーボール遊び」を対象に、局面1から3に分けて実際の授業場面を分析した。この教材事例から、技術は遊戯者にとって切実なる運動課題に即したものでなければならず、また、遊戯状況が活性化されれば運動課題に関連した技能も向上すると結論づけられた。

運動実践における言語の役割とその限界：滝沢文雄（千葉大学）は、運動実践と言語使用との関連を考察することによって、運動実践における言語の限界および有効な言語使用を明示しようとした発表である。まず、運動実践における言語の役割が検討され、実践を可能にする説明には幾つかの階層性があることが明らかにさ

れた。次に、言語的思考と身体的思考との差異によって、指導者の言語的指示の意味と有効性が変化することが指摘され、さらに、より具体的な運動習得の場面において、欠点の指摘や実施の指示が実践に際してどのような限界があるのかについて考察された。結論として、目的・意図と実践との関わりは、言語と実践との新たな分析を必要としていること、運動の実践場面で有効な言語を使用するためには実践のどのレベルで言語を使用するのか、また、どのレベルの言語を使用するのかを意識することが重要と言及された。

環境に適合した身体行動の出現：山田友美（岐阜大学大学院）は、運動する主体が運動を通して周囲の環境に対してどのような関わりをしているかを明示しようとした。発表では、「子どもと環境の関係性」「主体が環境に適応していること」、「世界の認識のしかた」の3点から、現代がより快適な生活が送れるようになった反面、人々が運動をあまり必要としない生活をも作ってしまったことを指摘した。

「トゥルネン＝スポーツ」抗争にみる近代ドイツの社会変容 社会的競争と大衆社会：釜崎太（弘前大学）は、啓蒙主義時代のイギリスには、文化活動において常に新しく「社会的競争」が確認され、スポーツもまたその重要な機会を提供していたことを明らかにした。その上で、「トゥルネン＝スポーツ」抗争が、世紀転換期のドイツ社会の変容に如何なる影響を及ぼすことになったのかとの問いに、このような「文化の相対的自律性」と「社会」の関係から、「トゥルネン＝スポーツ」抗争に一つの解釈を試みようとした。

2008年9月14日		
	氏名（所属）	テーマ
8：30～10：00	佐野 之人 （東亜大学）	スポーツと武道における精神性と精神主義 Spirituality and Spiritualism in Sport and Budo
	森田 啓之 （兵庫教育大学）	運動が「できる」と「教える」の関係性 The relationship of “perform” and “teach” of movement
	桑原 浩史 （上越教育大学大学院）	体育授業におけるゆとりの再考 - 遊び論を手がかりにして - Searching for Yutori in The Physical Education - Based on Theories of Play -
10：20～11：20	田中 愛 （武蔵大学人文学部）	シットイングバレーボールの教材化 - 「配慮できる 身体」の観点から Sitting Volleyball as a Teaching Material for Physical Education: From a Viewpoint of the “Considerate Body”
	堀田 高弘 （上越教育大学大学院）	遊戯状況における技術の存在論的意味について The Ontological Meaning of Movement technique in Situation of Play
11：30～13：00	滝沢 文雄 （千葉大学）	運動実践における言語の役割とその限界 Function and Limitation of Language in Movement Practice
	山田 友美 （岐阜大学大学院）	環境に適合した身体行動の出現 Investigating the apparent development of behavior pattern in differing environments
	釜崎 太 （弘前大学）	「トゥルネン＝スポーツ」抗争にみる近代ドイツの社会変容 - 社会的競争と大衆社会 - Social changes of modern Germany regarding the cultural conflict between Turnen and Sport: “Doux commerce” and mass society

日本体育・スポーツ哲学会第31回の学会大会は初めて北海道で開催される。日程は平成21年9月5日，6日，7日の3日間，会場は北海道教育大学旭川校，世話人は三浦裕氏である。多くの会員の参加を期待している。北海道，旭川でお会いしましょう。

受付 2009年5月10日